神を愛する者となる　　**ローマ 8 章 28 節**

新しい年2023年を今日迎えました。しかし、それは新しい年というページをめくるのとはちがいます。現在はデジタル化が進んでいますので新しい年にまたリセットして新しいものごとが始まってゆくようなイメージを持ちがちですが実際は昨日とはほとんど何も変わっていません。今日のことさえ明日になれば過去のこととなってしまいます。しかしキリスト者にとってはそのように直線的に時間、時を考えることが大切なことだと思います。つまり天の御国を目指して私たちは同じ道を歩んでいるということです。意味もなくただ時間が流れているのではないのです。昨年は教会員・教会の友８名の兄姉を天に送りました。愛する者が亡くなるのはまことに寂しいことですが、天の父なる神様の御許にはこの８名の方々が加えられたということになります。地上の教会の名簿から８名の方が減ることは天の御国に８名の方が加えられたことになります。亡くなった方のことを召天者と言いますがまさに神様がその方々を神様の御心の中で天に召されたのです。その時に召された理由や深い原因は分かりません。ただそれは神の御心の中で起こったということです。神の御心の中で起こったということは神がその魂に責任を持ってくださるということです。その方々は私たちよりも先に神様が呼ばれたわけですが神様につながる道を歩んでいることに変わりはありません。中には今まで後ろの方にいた方が、あるいは同じところに居た方が一足跳びに神様に近くおられるようになった方もおられるでしょうね。しかし神につながる同じ道を歩んでいますので遅かれ早かれいつかは再会するということになります。

さて 2023 年の元旦主日礼拝において選ばせてもらったみことばはローマ８章 28 節です。説教題は「神を愛する者となる」です。そうこれは昨年の蛍池聖書教会の教会指針と指針聖句です。つまり今年も昨年と同じ指針で教会の働きを進めてゆくということです。同じものにした理由はいろいろとありますが最も大きな理由はコロナ禍にあってやっと教会の活動が進みゆく中、今なすべきことはさらに教会形成を充実させるということであり、指針・スローガンといったものを新しいものに変えるということではないという理解からです。指針が変われば教会が、教会員がすぐに変わるかと言えばそんなことはないのです。さて今朝ローマ８章 28 節で「神を愛する人たち、すなわち、神のご計画にしたがって召された人たちのためには、すべてのことがともに働いて益となることを、私たちは知っています。」と聖書は告げます。「私たちは知っています。」がこの節の最後に記されていますが原文ではこの言葉で始まります。ここでパウロは「すべてのことがともに働いて益となる」ことを知っていると言います。私たちは、この地上の生涯において良いことも悪いことも経験します。この地上の生涯を与えられてから閉じられるまで、楽しいこと、嬉しいことしかなかった。そんな人はどこにもおりません。良いことも悪いことも経験せざるを得ません。しかし、それらのすべてが「ともに働いて益となること」を私たちは知っていると言うのです。良いことも悪いこともあるけれど、結局の所、益となるのですと聖書は告げます。しかしそれは、「災い転じて福となす」とか「人間万事塞翁が馬」といった意味ではありません。悪いことがあっても結局益となるのだから、ポジティブに考えていこうという話ではないのです。

この「すべてのことがともに働いて益となる」というのは、結局最後は私にとって都合の良い結果になるということではなくて、すべてのことが共に働いて、神様の御心が成っていく。神様の御計画、神様の救いの御業が前進していくという意味です。私たちは、自分が経験する出来事にどんな意味があるのか、今経験していることは過去のどんな出来事と繋がり、或いは将来のどんな出来事へと繋がっていくのか分かりません。しかし、すべての出来事は神様の御心のなかで起きている。そして神様の許し無くしては何一つ起こらない。そのことを信仰を持って受け止めるならば、私たちには意味がよく分からない出来事であっても、神様はその意味を御存知であり、それは結局の所、神様の救いの御業が前進していく、そのために共に関連し合っているということを私たちは知っているということなのです。具体的に、この出来事は次のこういう事態へと繋がっているなどということは私たちには分かりません。しかし、この出来事

も神様の御心の中でのことであり、そうであるならば、必ず神様の救いの御業の前進のために働くことになる、そのように私たちは信じているわけです。

これは誰にとっても理解できるようなことではありません。しかし、「神を愛する人たち」「神のご計画にしたがって召された人たち」には明らかなことなのです。「神を愛する人たち」「神のご計画にしたがって召された人たち」とはキリスト者ということです。それでは「神を愛する人たち」とはどのような人のことを言うのでしょうか？

1)神を愛する人とは神を信じる人のことです。

キリスト者とは神様を愛する者です。神様を信じているけれど愛していない。そんなことはあり得ません。神様を信じるとは、神様を愛することと同じです。神様を信じて信仰のうちに一歩進むと神様が答えてくださる。そこでまた次の一歩となってゆきます。信頼できるお方であればあるほど私たちは喜んで捧げることができます。しるしや奇跡を見せてくれたら信じますと言う人がいます。トマスという弟子は復活の主に出会った時に「私は釘の跡や、脇腹に触れてみないと信じられない」と言いました。しかしイエスはトマスに自分の脇腹に触れさせた後、「あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ないで信じる人たちは幸いです」ヨハネ 20:29 と言われました。人間関係において愛が冷めてゆくのは不信感が出てくる時です。もっとしるしを見せてくれたらもっと神様を信じます。愛します。というのは筋道が立っているようで順序が違うのです。

2)神を愛する人とは神に愛されていることを覚える人のことです。神を愛するとは神を信じることであると言いました。では、その神様への愛、神様への信仰はどのように与えられたというのでしょうか。それは自分が求め続けた結果やっと手に入れることが出来たというようなものではないと思います。あるいは何も疑うことなくすんなりと神を信じるようになったというものでもありません。そんな人ばかりなら牧師はとても気が楽になりますし、楽しい仕事ということになるかもしれません。皆さん、ご自分の信仰生活の最初の頃を思い出していただきたいのですがこの自分が信じているということ自体、奇跡的なことと思われませんでしょうか？私が信仰を持つようになったのはただそれが神様のご計画とみ心の内にあったからだとしか言いようがないと思うのです。ローマ人への手紙を書いたパウロにとって、このことは決定的に重要なことでした。なぜならそれは、パウロが元々はキリスト教を迫害していた者だったからです。ところが、神様は自分を選び、キリストを信じ、愛し、宣べ伝える者とされた。パウロの中に、神様によって選ばれるにふさわしい何かがあったということではありません。それはパウロにとっては決定的に重要なことでした。キリスト者を迫害していた自分が召し出され、イエス様を愛し、信頼し、宣べ伝える者になった。それは、ただただ神様の一方的な恵みの選びとしか言いようがありませんでした。自分のような罪深い者さえ選び、召し出し、救いの御業を前進させられる神様。このお方の御支配の中でこの世界の営みのすべてが為されているわけですから、すべての出来事は神様の救いの御心、救いの御計画によって前進しているということを信じる。それはパウロにとってごく当たり前のことでした。同時に神様に愛されていることを知ったのです。自分の罪深さに気が付けばつくほど神様がどれほど自分のことを愛して下さっているのかが分かるのです。神に愛されていることが分かるという時点で神を愛していることにもなるのです。ですから神を愛そう、愛そうと力むのではなく、どれほど私のような罪深い者をそのまま赦し、受け止めていてくださるかが分かれば分かるほど神を愛しているということになります。

3)神を愛する人とは神に心から従う人のことです。自分が救われた。キリストを愛し、信じる者になった。それはただ驚くばかりの神様の恵みでした。そうであるならば、どんなことであってもすべてのことが必ず、神様の救いの御業が前進するために用いられるという確信に変わってゆきます。

このことは、聖書から具体的な例を幾つも示すことが出来ますが、最も大切な例として、イエス様の十

字架を挙げることが出来るでしょう。イエス様はイスカリオテのユダの裏切りによって、また律法学者や祭司長たちのねたみによって、十字架に架けられて殺されました。この出来事は、人が神の御子を殺すという最悪の出来事でした。しかし、神様はこの最も罪深い出来事を用いて、私たちの一切の罪を赦すという、神様の救いの御業を成就されました。「すべてのことがともに働いて益となる」とは、そういうことです。更に、イエス様は三日目に復活されて、肉体の死によって終わらない命、永遠の命、復活の命への道を私たちのために開いてくださいました。実に、神様の救いの御業は、人間の最も罪深い出来事を用いてさえ前進して行ったのです。神様がこのようなことを成されるお方であることが分かったなら罪深い私の人生においても神様は「すべてのことがともに働いて益となる」働きをしてくださるに違いありません。今まで幾度かメッセージの中で証しさせていただいたことですが東京にある神学校時代のことです。当時７０歳ぐらいの男性が聴講生として幾つか一緒に授業を受けました。M さんとしておきます。退職されていましたが長い間教会の役員として奉仕されました。おられた教会の先生は名物牧師として名が知られた先生でした。何せ戦時中特攻隊で明日にも出撃という時に終戦となったので残りの人生はおまけのようなものと捉えておられ、それはそれは厳しいことで知られた先生でした。その先生に意見できる唯一の役員が聴講にこられていた M さんでした。ところが M さんは途中ガンの治療のため聴講に来ることは出来なくなりました。そのガンは骨の部分も含めるので相当な痛みがあったということです。ただ息子さんは教会に来ておらずそのことが M さんにとっては気がかりなことでした。ある時、息子さんがお見舞いに来た時にあまりの痛みに声を発せられたそうです。息子さんが帰った後、奥さんに「こんな弱い姿を見せてしまったのであいつ（息子）はもう教会からはもっと離れてしまうだろう」とがっかりされました。そしてその後 M さんは天に召されました。しかししばらくしてから何と息子さんは教会に行くようになったのです。彼はこのように証ししました。「神様を信じているおやじでさえあんなに痛みの中を通るのであれば神様を信じていない自分はもっと想像もつかないぐらいの痛みを通るはず。そんなことを考えると言いようもない恐怖が襲ってきた」と言われました。神様は「すべてのことがともに働いて益となる」働きをしてくださったのです。ですから私たちに求められているのは自分の中で計画したり、この程度にしておこうというのではなくすべてのことをともに働かせて益としてくださる神様を信じ、自分自身を主に委ね従う道が求められているのです。

始まった新しい年もさらに私たちが神を愛する者として成長することを目指して教会生活に励みたいと願わされます。祈ります。